

伯玄どん「夜さりの田すき」

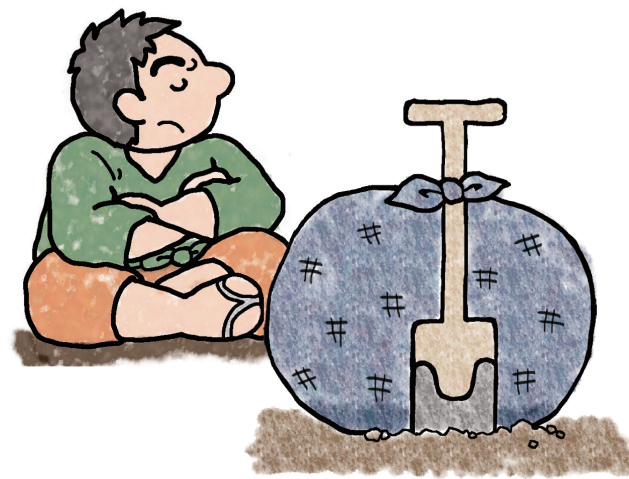
むかしむかし、小倉村に伯玄という働き者で大食いの大男が住んでいました。庄屋さんや村人に雇われて田畑の仕事をし、生活していました。村の人たちは、仕事はやくて上手な伯玄を「伯玄どん」、「ハッケンさん」と親しみを込めてよんでいました。



ある年の秋、伯玄どんは田すき(※)の仕事を頼まれました。伯玄どんは、早速、大きな大きなぎりめしの入った弁当箱を風呂敷に包んで背中に担ぎ、手にすきを持ち、田んぼに入ろうとしました。それを見ていた雇い主の旦那は、伯玄どんが担いでいる弁当風呂敷の大きさにびっくりして、「伯玄どん、あんたあ、田すき仕事ははやいって聞いたるばってん、田すきは伯玄どんがしよるっちゃのうして、あんたが担いどる弁当がしよるっちゃろう」とからかったのです。

注) 田すき: 田畑を耕すこと

それを聞いた伯玄どん、旦那の話が終わるか終わらないうちに、顔がみるみる真っ赤になり、胸のあたりで結んでいた風呂敷をほどいて、持っていた鋤にぶら下げました。



「そげなこと言うなら、弁当が田を耕せるかどうか、よーく見とってつかーさい」と、田んぼの土手にどしんと腰を下ろしてしまったのです。

つまらない冗談を言ったばかりに、旦那がどんなに謝っても、伯玄どんは尻に根が生えたようにビクとも動きません。

「伯玄どん、今のは冗談たい。弁当が田すきをできるもんかい。許してくれんか。田を耕してくれんかね」旦那は、おがむようにして一日中伯玄どんに頼み続けました。



日も暮れかかった頃、伯玄どんも少しだけ旦那が気の毒になってきました。そこで、「わかってくれたならそれでよか」とひとこと言い、立ちあがりました。そのあと伯玄どんは、夜さり(一夜)のうちに、人の二日分の田仕事をしたといひます。

伯玄どんは、本当にいた人物？

たらふく食べて、働き者、素直で雇い主をおそれず、曲がったことは大嫌い。田仕事もはやく、馬の看病もできたという伯玄どん。

伯玄どんが、本当にいたかどうかはわかりません。人々の生活の中から生まれた、農民憧れの架空のヒーローだったのかもしれませんが、けれど、農民のヒーロー、伯玄どんのお話は世代から世代へ語り継がれ、いつしか「民話」となり、今に伝わっているのです。